UrbanDesignLab.Magazine

2014.11.25 vol. 223

読書の秋 ― 思い出の一冊 ―

READING IN AUTUMN "A BOOK FULL OF MEMORIES"

先生方が選ぶ、思い出の一冊 p.2
22 冊の本に込められた思い p.4
研究室へようこそ　高さん・大森さん p.6

東京大学
工学部都市工学科／
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/

編集長：　高梨 遼太朗
編集委員：道喜 開視　原 由希子　今川 高嶺
柄澤 薫冬　柴田 純花　髙橋 舜
中島健太郎　益邑 明伸

先生方が選ぶ、思い出の一冊

A Book Full of Memories : Teachers

秋も深まる 11 月、今月号のマガジンは「読書の秋」特集と題してお送りします。研究室内のみなさまが、普段の研究室生活の中で何を考え何に関心を持っているのか、この「一冊」から見えてくるのではないでしょうか。

まずは、西村教授、松田助教、クリス助教、中島助教に都市に関する思い出の「一冊」を伺いました。学生時代のエピソード等交えつつ、ご紹介頂いています。

西村教授の一冊

“ 将来の生きる道が固まったといえるかもしれません ”

日本のすまい

西山 夘三

頸草書房、1975-80 年、全 3 冊

じつは同じような質問をかつて東大出版会の PR 誌である『UP』編集部からされ、その結果は文春新書『東大教師が新入生にすすめる本２』（文藝春秋編、2009 年）に載っています。ただ、その時は複数の質問に答えながら何冊かを挙げる形式だったので、「一冊」といわれると少し考えてしまいます。

都市に関する思い出の一冊ということですと、西山夘三先生の『日本のすまい』（全３冊、頸草書房、1975-80 年）ということになると思います。今では絶版で，手に入りにくくなっているようですが、図表からスケッチ、装丁までご本人による手作りで、日本のすまいの全貌を描ききってしまおうという壮大なエネルギーに満ちた力作です。学生時代に高価だった３冊（当時の定価は合計 27,000 円でした。国立大学の授業料が年間 12,000 円の時代です。ただし、当時の国立大学の授業料のほうが不当に安かったとも言えますが。）を即座に購入した時に、おそらく将来の生きる道が固まったと言えるかもしれません。

あとは英文で読んだ『A Pattern Language』（C.Alexander et al. 1977、当時まだ和訳がでていませんでした。The ではなく A であることに注意。）や原広司先生の『集落の教え 100』（彰国社、1998 年）からも大きな影響を受けましたが、2 冊以上挙げるのはルール違反かもしれませんね。

松田助教の一冊

“ そこは、都市をめぐる思考の実験場であった ”

『10 ＋ 1』NO.1 特集

ノン・カテゴリー・シティ

都市的なるもの、
あるいはペリフェリーの変容

編集：多木浩二、八束はじめ

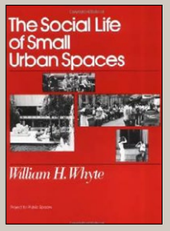
INAX、1994 年

都市と建築に関する、その後 50 号まで続く批評雑誌『10+1』（1994-2008）の、記念すべき第１号です。1994 年５月に刊行。当時僕は大学２年生で、駒場の生協で見つけ、強い興味を持って読み、その後の進振りで都市工を受けることになるきっかけのひとつにもなりました。多摩ニュータウンを扱っていますが、具体的な多摩からは想像もつかないようなスリリングな内容の連続です。抽象的な哲学的論考に加え、美しい図版、実験的なグラフィックと、都市と建築をめぐるアクロバティックな思考に魅了されました。そこは、都市をめぐる思考の実験場であった、といってもよいかと思います。

『10+1』は、1980 年代のニューアカブームの末裔につながり、当時すでに伝説的で、各巻 500 ページ前後もあった雑誌『GS』（1984-1987、第１号の特集は「反ユートピア」）の編集をしていた荻原富雄さんが、その後に仕掛けた雑誌です。90 年台半ばにあって、太田出版から出版されていた『批評空間』（1991-2002、編集委員は柄谷行人氏と浅田彰氏）と並び、都市建築分野におけるハードコアな批評を展開していました。いま、ウェブサイトで展開されている「10+1 web site」（http://10plus1.jp/）は、当時よりずいぶん穏やかで優しくなったヴァージョンですから、もし興味があれば、当時の雑誌を手にとって見て下さい。空気感の違いが分かるかと思います。

クリス助教の一冊

“ how scholarly research can contribute to change planning and design policies ”



The Social Life of Small Urban Spaces

William H. Whyte

Project for Public Spaces Inc, 1984

The book, which was already published in 1980 and which is accompanied by a 60-minute film of the same title (You can watch it under the following link: https://archive.org/details/SmallUrbanSpaces) was written by one of the leading public space researchers. It is a very accessible, easy to understand book, which offers a great variety of thoughts on research methods, use, control and design of (privately owned) public spaces (POPS). Most importantly, it demonstrates, how scholarly research can contribute to change planning and design policies for the better. Highly recommended!

中島助教の一冊

“ 都市が「復興」するということ ”

ゆるす思想　ゆるさぬ思想

若い世代と語る平和・原爆・いま・未来

本島等、山口仙二
こうち書房、1992 年

赦し　長崎市長本島等伝

横田信行
にんげん出版、2008 年

今年 10 月 31 日に元長崎市長、本島等氏が亡くなった。氏を知ったのは、博士論文で戦災復興区画整理の研究をしている中、研究対象の東京だけではなく、全国の戦災復興区画整理を知らなくてはと思い、お金と時間の許す限り全国を歩いて回っていた時に長崎について調べている時だった。天皇の戦争責任を問い、広島原爆ドームの世界遺産登録に際し「広島よ、おごるなかれ」と批判した本島氏は、五島列島の隠れキリシタンの末裔だ。都市が破壊され、多くの人が犠牲になり、また残された人は都市を「復興」する。原爆が落ちる前の長崎の辿ってきた時間、その分厚さも含めて戦後半世紀経った歴史について理解することなしに、長崎の復興は見えてこないことを痛感した。本島氏に関する本を読み、必ずしもそこにいた人に共感したいということではないのだけれど、そこで人々が何を考え、生きてきて、何を主張していたのかちゃんと理解したいと考えながら、当時、街々を彷徨い、歩いていた。大半はただその空間の面白さを追いかけていたのだが、果たして、自分は日本の戦災復興というか、都市が「復興」するということについて何かひとつでもわかっただろうか。いや、しかしながら、一片でも書けたこと、わかったことはあった。東京を対象に、区画整理について、当時の背景から自分にしか描けないものが描けたことは確かだ。だが、しかし、しかし、とも常に思うのだ。

地域デザイン研究室より

窪田教授の一冊

“ 抑えた筆致の行間ににじむ膨大な経験 ”

今回の特集にあたり、是非紹介したい本があるということで、地域デザイン研究室窪田教授にも一冊をご紹介頂きました。

都市保全計画

西村 幸夫

東京大学出版会、2004 年

手にとってまず全部を通読した。千ページを超える大著で、常識的には通読する量ではないのだろうが、一文字も逃したくなかった。抑えた筆致の行間ににじむ膨大な経験とそこで得られた唯一の感触は、私が読みたいと渇望していたものだった。あ、あのときの議論がここに、と思える箇所も何度かあった（もちろん私の勝手な思い込みです）。何を記述して何を記述しないのか、その判断が重要なのだと改めて教えていただいた。研ぎすまされた記述の正確さが論理に強度をもたらし、知の体系が構築される。

折りに触れて常にこの本を開き、書き込んで線を引き付箋を貼ってきた。その度に、拠り所がある幸せを感じた。

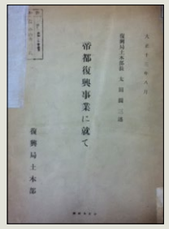
西村幸夫先生がニューヨークに長期滞在されて『都市保全計画』を執筆されているとき、私は都市デザイン研究室の助手だった。いくら西村先生でも、考えていることを文字にすることに恐さを感じないわけはないだろうし、難度の高い気の遠くなる格闘に違いなかった。しかし、一時帰国されたときに、忙しい在外研究の中でも、一日執筆に集中できる日もたまにはあって最高だと笑顔でおっしゃっていた。

22 冊の本に込められた思い　学生の思い出の一冊

A Book Full of Memories : Students

続いて、研究室内の学生にも、都市に関する思い出の一冊を紹介いただきました。学部４年生からまち大の方まで、多くの方にご回答いただいています。今回は、本の出版年順（多言語で出版されている場合は原語版の出版年）にご紹介します。

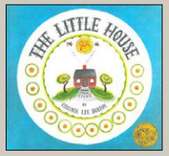
まちづくり大学院・M2
森田 曉　1924



帝都復興事業に就いて
太田圓三

関東大震災後の講演録。詩人・木下杢太郎の実兄で、非業の死を遂げた帝都復興院土木局長が、九段下立体交差など実現しなかった夢についても語る。

M1
柄澤 薫冬　1942



ちいさいおうち
バージニア・リー・バートン

読んだ本の内容をすぐ忘れてしまう質なのですが、なぜかずっと覚えている本です。50 年前と今とで考えている問題は変わらない気がします。

まちづくり大学院・D3
若松 久男　1970

表徴の帝国　ロラン・バルト

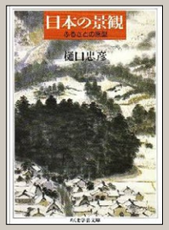
1990 年頃、約 25 年位も前になりますが、仲間と東京を見て回り、それを雑誌の連載特集記事で発表していたことを思い出します。多忙極まる時期でしたが、あらためて、建築と都市と景観とを意識し始めたのもその頃だったと思います。それが現在の研究活動の一つの礎になっているように思われます。その時期に出会ったのがバルトの「表徴の帝国」L'EMPIRE DES SIGNES (1970 年) です。東京をそうみるのか。という発見が今も新鮮です。バルトは 1980 年に世を去りましたが、ご存命であれば丁度 100 歳。今の東京をどのように見るか。またどんな言葉で語るのか。そんなことを思います。

M1
羽野 明帆　1978

無縁・公界・楽
網野善彦

大学一年の講義で読んで、初めて都市や場所に興味を持った。それ以来初心に帰りたいときに読んでいて、自分の根っこの考え方に影響している本。

まちづくり大学院・M2
玄田 悠大　1981



日本の景観―ふるさとの原型
樋口忠彦

何かのきっかけになった１冊は印象深いもので、この本が、もともと関心のあった風景やまちにさらに足を踏み入れるきっかけとなりました。

まちづくり大学院・D3
川崎 泰之　1983

都市ヨコハマをつくる
田村明

恐らく学生の頃初めて読んだと思います。ヨコハマをどのようにつくってきたかがよくわかりました。また私が都市デザインという仕事に関心を持ったのも、この本の具体的な内容からイメージできたからだと思います。

M1
益邑 明伸　1987

都市のドラマトゥルギー
東京・盛り場の社会史
吉見俊哉

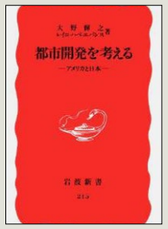
都市の変容を、社会情勢や演出側の意図だけでなく、その時代を生きた人々の心情、感受性が反映されたものとして描き、構造化していく様に興奮した。

M1
柴田 純花　1987

街道をゆく 18 越前の諸道
司馬遼太郎

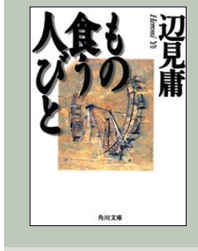
卒業設計で思い悩んでいた時に読んだ一冊。越前の小さな集落にある、何気ないうつくしさ・豊かさを表現した僅か数行の文章に救われ、励まされた。

M1
髙橋 舜　1992



都市開発を考える
―アメリカと日本―
大野輝之 / レイコ・ハベ エバンス

アメリカの市民参加や成長管理の手法を紹介している。芦原義信「街並みの美学」と共に都市のことを真面目に考えようと決意してから最初に読んだ本。

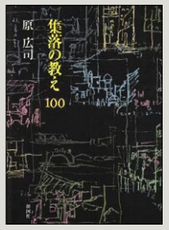


M1
今川 高嶺　1997

もの食う人びと　辺見庸

都市とは直接関係ないので不思議に思うかもしれませんが、世界にはこんな人たちがいて、こんなふうに暮らしているっていう世界をリアルに想像でき、高校時代に土木や都市計画に興味を持ったきっかけになりました。

M2
道喜 開視　1998



集落の教え 100
原広司

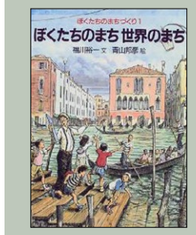
「逃亡者たちは、楽園をつくる。」人間くさいこの言葉が好きです。空間の多様な見方を学部４年で学び、海外へ行きたいと思うきっかけにもなりました。

D2
永井 ふみ　1999

風景デザイン
感性とボランティアのまちづくり
進士五十八、原昭夫他

はじめて読んだまちづくりの本。風景は人に根差し人が育てるもの―当時も住んでいた世田谷の住民参加による都市デザインのスタイルは、私の原点です。

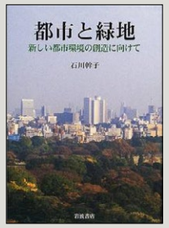
M1
森川 千裕
1999



ぼくたちのまちづくり
福川裕一、青山邦彦

院試の時に、内容が院試に出ると ということを聞き、熟読した絵本です。この絵本を読んで、まちづくりについて初めて真剣に学びました。

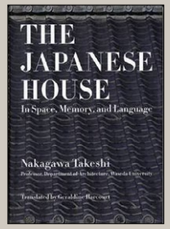
まちづくり大学院・M2
末松 勇
2001



都市と緑地
石川幹子

昨年３月に退官された先生の著作。19 世紀以降の欧米、日本の公園緑地の変遷について体系的に整理された名著です。願わくば、近現代の日本の公園緑地についての記述が少ない（例えば国営公園等）ので、どなたか続きを書きませんか？

D2
Nadia Abdul Wahid
2002



the Japanese House　Nakagawa Takeshi

As the title goes, it elaborately explains about the Japanese House in the perspective of Space, Memory and Language. The book was written as somesort of a memoir for a Japanese house. This is because as modernization takes place, many of the old houses were replaced by new buildings, thus making it hard for the younger generations to appreciate and understand the concept of an old Japanese house.

The Japanese traditional domestic architecture had a large vocabulary regarding its site, components, fittings, boundaries, materials and so on. So, this book has helped the general audience to understand the old houses from the bigger context such as boundary spaces, partitions, and settings, to the smaller components such as fittings and materials.

B4
越野 あすか
2007

世界の SSD100
都市持続再生のツボ
東京大学 cSUR-SSD 研究会

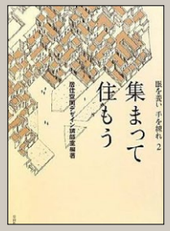
都市計画の本で最初に手に入れた本。全部読んだわけではありませんが、気が向いたときに気になった所を見てやる気やヒントをもらいます。

M1
中島 健太郎
2010

テキスト ランドスケープデザインの歴史
武田史朗、山崎亮、長濱伸貴ら

昔から本を読んでいないため、今後思い出に残るであろう１冊です。近年の動向にも詳しく今後の都市計画が向かうべき方向性についても示唆的です。

M2
高梨 遼太朗
2010



集まって住もう
居住空間デザイン講師室

集住演習で教室に置かれていたのを読み、形の理論が生活の現実に与えられる影響の多様さに感動。そっと持って帰った。以後シェアに興味を持つ。

M1
李 美沙
2013

スローシティ
世界の均質化と闘うイタリアの小さな町
島村菜津

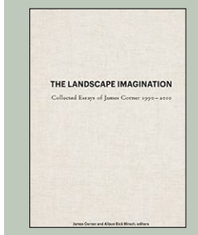
大学４年のゼミで都市に関する本を何も知らず選んだ新書でしたが、都市について初めてじっくり議論して、もっと知識を積んで意見できるようになりたいと思った一冊です。

M1
滝澤 暢之
2013

マックスマップル 全日本道路地図　昭文社

地図好きなので旅先で開いたり家で眺めたりと特に中高時代にお世話になりました。地図をじっくり“ 読書 ”してみるとたくさんの新たな発見に出会えます。

D3
Ilze Paklone
2014



The Landscape Imagination: Collected Essays of James Corner
Nakagawa Takeshi

Following the ideas Corner, mapping is conceived as a collective enterprise that simultaneously recognizes the existing in territory, imagines and creates its potentials through visualization. The ideas of mapping as a generative force and mutual determination between territory and its interpretations expresses what has been identified as ‘performativity’ or hidden potential of the territory and acknowledges that these reciprocal relationships continuously reshape both realms, physical world and structures of thought, represented (reference) and representation. It is the shift from the logical model of visual language, grounded into the idea that optimized sign systems can effectively represent the world without any communicative distortion, towards rather diverse models of visual languages, which emphasize subjective and partial conceptual worldviews and focuses rather on ‘what the image can do and less what it means’.

M2
渋谷 政秀
2014

これからの日本に都市計画は必要ですか
蓑原敬、藤村龍至、饗庭伸、姥浦道生、中島直人、野澤千絵、日埜直彦、村上暁

思い出…とは言えないかもしれませんが、今読んでる本。都市計画のこれまで、これからを扱っている。俯瞰的な視点が得られて、勉強になります。

凡例

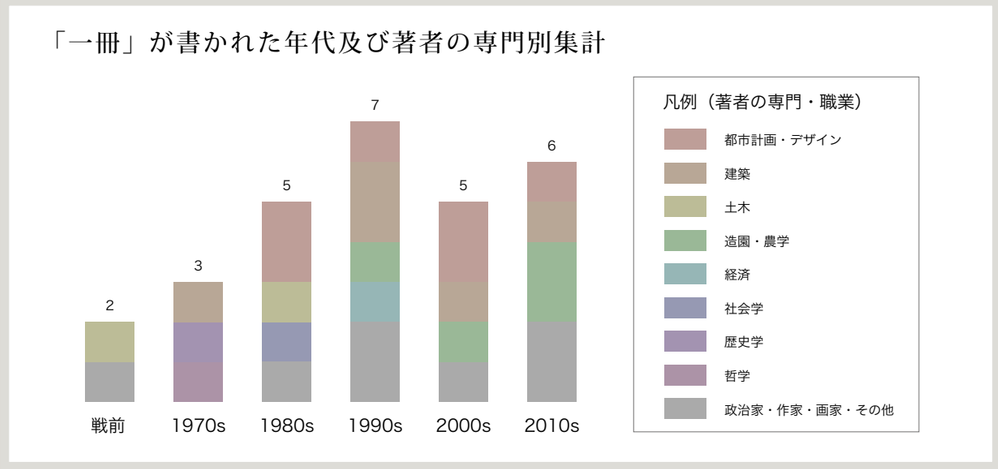
学年
名前　出版年

表紙

タイトル
サブタイトル等
著者

紹介文

多分野にわたる興味　建設、造園から文系学問まで
Wide Range of Interests



先生方および学生の皆様に回答いただいた「一冊」を、書かれた年代順／著者の専門別に分類し、集計しました。都市計画・デザイン（６名）や建築（５名）、造園・農学（４名）の分野の著者の本を挙げた方が多く見られます。また、文系分野への関心も多岐にわたります。ご回答いただいた皆様、ありがとうございました。

研究室へようこそ！　～ 高さん・大森さん ～

Welcome to our laboratory!

またこの研究室に新しいメンバーが増えました。そこで、この 10 月から研究室に新しく入ることになった高沂琛さんと大森文彦さんに自己紹介文を書いていただきました。また、ポルトガルから来られた João Silva Leite さんは今度 web マガジンの方で紹介したいと思います。

（編集:M1 今川）

研究生：高沂琛　Yichen GAO

中国の浙江大学からの留学生です。先日の研究室旅行では現地で杭州を一緒に見て回り、案内してもらいました。

初めまして、中国から来た高沂琛（GAO Yichen）と申します。この 10 月から、研究生として都市デザイン研究室に入りました。博士論文の理論研究と資料収集のために、ここで 1 年留学する予定です。

私は歴史的地域のまちづくりに関心を持っています。中国では、歴史的地域のリノベーションはほとんど政府がやっていますが、まちづくりのようなボトムアップなやり方は滅多にないです。でも、近年市民の意識が高まり、都市計画の市民参加も学者だけではなく、行政側も強調し始めます。そういう背景の中、歴史的地域のまちづくりも理論研究だけで留まらないと思います。だから、日本の経験に生かして、中国ならではの歴史的地域まちづくりの方法を探るため、この研究室に入りました。

これからの 1 年間、日本で歴史的地域のまちづくり理論勉強はもちろん、いろいろな実例も見に行きたいです。

1 年は短いですが、どうぞよろしくお願いします。

▲高沂琛さんに浙江大学を案内してもらいました。

Fumihiko OMORI　博士一年：大森文彦

この研究室の OB で、この度働きながら研究することになりました。修士論文では遊休内港地区の漸進的再生に関する研究をされました。

2012 年度に修士を修了した大森文彦です。現在は鉄道会社で働いております。修士では三陸の被災地に何度も足を運びながらも、研究として成果に結び付けられなかった点に、忸怩たる物がありました。仕事をしながらではありますが、博士では今一度、都市と自分に向き合う時間を作っていければと思います。よろしくお願いいたします。

information

11 月のウェブ記事

ミナトブンカサイ 2014 開催！
佐原メンバー高校で講演！？
今後の三国を考える、住民ワークショップ
盛り土が進む大槌で
渋谷プロジェクトのいま
神田老舗まちかどツアー開催！

是非ご覧下さい：http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

12 月の予定

12 月 5 ～ 6 日	マガジン編集部岐阜訪問
12 月 10 日	研究室会議
12 月 13 ～ 16 日	大槌訪問
12 月 14 日	三国中間報告
12 月 18 日	忘年会

編集後記　柴田 純花

思い出の一冊を教えていただいた皆さま、改めましてありがとうございました。さて、読書の秋特集ではありますが、私にとっての「○○の秋」は音楽の秋です。歌謡曲・洋楽・ミュージカル・アイドルソングと、気分と気候次第で何でも聞きます。最近の悩みは、徒歩通学のあいだ音楽を聞くか否かです。気候に合った音楽を聞きたい、でも街の音も聞きたい・・・と悩んだ末、片耳だけイヤホンをして登下校することにしました。朝の本郷通りに響く、箒で落ち葉を掃く音は今がピークです。お聴き逃しなく。